
青い海の王国

沢尻 炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い海の王国

【Nコード】

N1803Y

【作者名】

沢風 炯

【あらすじ】

青い空と深い海に囲まれた島。その島民達は、一人の人魚とともに暮らしていた。

本土では絶滅したと思われる人魚だ。

しかし本土から王子の花嫁候補を連れに来た事によって、人魚の存在が明らかになり・・・

（思いつきで試験的に書きました。）

人魚とともに暮らす島

青い青い空と、深い深い海。

眩しい程の太陽の光を受けて海の遠くを見つめているのは、海辺で暮らす島民の娘。

日に焼けて色素の抜けた髪は腰まで長く、それを編んで、頭で小さく丸めてから脇へ流していた。

彼女の頭には花弁の小さな生花が飾られていて、日に焼けた精悍さに、少女の可憐さを添えていた。

遠くをじっと見つめる彼女に、駆け寄ってくるものがあつた。

「ディア！聞いたか？」

「うるさいわよ、セイ。大きな声じゃなくたって聞こえるから。」

セイと呼ばれた青年は、最近になってこの島へ越してきた。明るい性格ですぐに島に溶け込んだ。

セイはディアに一目惚れした。ディアにそれは伝えたのだが、きっぱり断られてしまった。

それでも側にいたくて、けど少し距離を取って、こうして会いに来る。

「何見てるんだ？」

問いかけるとディアはちらりとセイを見た。

「・・・ああ、そうか。あんたはまだ見た事なかったもんね。」

「・・・なんの話？」

分からないのが悔しくて眉をひそめる。と??

「ノア！」

いきなりディアが嬉しそうに叫ぶので、咄嗟にその目線の先を追う。

「？」

海から何かが来る。

飛び魚のように海と空を滑り、かなりの早さでこちらへ向かって来ている。

「ディア！なんだあれ・・・！」

見ると、ディアはこの上なく嬉しそうに近づく物体を見ていた。正直、面白くない。

「ディア！」

そう呼んだのはセイではない。ぎょっとしつつも近づいた物体を見ると、自分の目が信じられなかった。

「なんだ・・・これ・・・」

丸太で組まれた通路の、すぐそばまでやってきたそれは、ディアを見上げてにこりと笑った。

「待たせてごめんね？あの・・・これくらいでいいの？」

ディアにそう問いかける声は可愛らしい女の子のものだ。ついでに微笑む顔も。身体も。だが。

「十分よ、ノア。いつもありがとね。」

ディアはノアから網を受け取った。そこには数匹の魚が入っている。

「え・・・魚取らせてたのか？」

思わずそう訊ねる、とノアはここで初めてセイがいる事に気付き、さっと離れた。その動きはとても滑らかで、美しくもある。

「あ、ノア！大丈夫よ。こいつはセイって言って、最近島に来たや

つなの。大丈夫よ。」

セイはまじまじとノアを見た。少し離れたおかげで、全体が把握出来る。

「ディア、これ・・・」

驚愕するセイがノアを指差すと、渾身の力を込めて叩かれた。

「いつてえ！」

「ノアに向かつて”これ”とは何よ！しかも指差すな！」

ディアが本気でキレている。セイはしぶしぶ謝り、また視線をノアへ移した。

何度見ても間違いない。ノアは・・・。

「ノアって・・・人魚、だよな？」

間抜けな問いに溜息をつき、ディアはノアを手招いた。

「ノア、いらつしやい。今日は何か行事があるみたいなの。一緒に着飾ってみない？」

「そうだ！その行事、何か聞いたか？」

当初の用件を思い出して、セイは訊ねた。おそろおそろ側まで寄ってきたノアは、導かれるままディアに腕を引かれる。

「さあ、内容は聞いてないわ。ただ、本土から偉い人が来るから、皆正装しなさいって婆様に言われたけど。」

人魚といえど一人の女の子。ディアが海から引き上げるのに苦勞していると、セイが海へ飛び込んで、ノアを抱き上げた。

「きゃっ・・・！」

ノアはかなり驚いていたが、驚きすぎて身動きが取れないらしい。「セイ・・・いきなり触るんじゃないわよ。ノアが怖がつてるでしょ？」

「悪い。けどディアじゃ持ち上げられないだろ。な、ノア。」

「えっ・・・」

いきなり話しかけられて戸惑うノアに笑いかけ、セイは通路の上

にノアを持ち上げた。すぐにセイも通路へ上がる。

「ディアの家に行くのか？」

「そうよ。どうせだからセイ、ノアを運んでよ。」

「ディア？私・・・」

「遠慮はいらないわよ。力仕事は男の仕事よ。」

「そうそう、遠慮すんなよ。」

言いながらひよいとノアを抱き上げると、セイはその鱗に覆われた尾をまじまじと眺めた。

（ほんとに人魚だ・・・。鱗がすっげえ綺麗・・・）

「あ・・・」

遠慮がちにかけられた声に視線を移すと、ノアがおそろおそろ訊いてきた。

「気持ち悪く・・・ないですか？」

「は？」

一瞬、なんの事か分からなかった。だが、すぐに察しがつく。

「ははっ、全然！綺麗じゃん。」

綺麗、と言われてノアの頬がほんのり朱に染まる。

「ほら、ぐずぐずしないですよ。ちゃんと用意してお迎えしないと、婆様怒っちゃうから！」

「分かってるよ。」

すたすた歩くディアを追って、セイも足を進めた。

慟哭（前書き）

残酷描写があります。お気をつけ下さい。

慟哭

ディアの家に入ると、婆様が正装を出して用意してくれていた。

「おやセイ。あんたも一緒だったのかい。」

セイはひょこりと頭を下げ、婆様に挨拶をした。

「お邪魔します。兵士が来るって、ディアに伝えようと思ってさ。」

「兵士？」

怪訝そうに見られる。ひとまずノアを手短な場所へ下ろして、その隣に座った。

「そう。なんでも王子の花嫁探しだったさ。」

そう言いながらちょっと不安になる。まさかディアが連れていかれはしないかと。

ディアは、綺麗だ。もちろん容姿も。だが、それ以上に滲み出る芯の強さ。

綺麗だ。

それはセイだけの意見じゃない。言えば怪訝そうな顔をされるから、皆あまり言わなくなっただけ。

「なんだってこんな島に。花嫁候補なら本土にたくさんいるでしょうに。ねえ？」

ディアは自分の用意はさておき、ノアの髪を櫛で梳き始めた。

「ディアは、本土の人が嫌いなのか？」

「あんまり好きではないわね。会った事はないけど。」

本土とこの島とはあまり交流がない。島の、この島民が暮らすところまで本土の人間がくる事は、ディアの生きていた中ではなかった。

「そうなの……。でも、会わないといけないの？」

「そうなの。けど前に出ないといけないわけじゃないから、この程度ならいいわ。」

「そう……」

本土からの要求を断る事は出来ないが、長でもないディアが前へ出ないといけない理由はないのだから。

「けど、ディア。これは花嫁探しだぞ？気をつけるよ。」

真剣に注意を促すセイに、ディアはにこりともしないで言いのける。

「こんな仏頂面を嫁にしたがる方が可笑しいわ。」

言いながらノアの顎を少しあげさせ、その唇に紅を引いた。

「あ、やっぱり可愛いわ、ノア。」

満足そうにディアに微笑まれ、ノアは照れたように笑った。

「……ノアも、気をつけた方がいいな。」

「わたし？」

きょとんとしてノアに見られる。セイは大きく頷いた。

「なるべく目立たないようにいろよ。二人とも。」

「言われなくても目に触れないようにするわよ。ね、ノア。」

「う、うん……」

「なあディア、ノアを連れてく意味はあるのか？」

そう問うと、ディアは当たり前だと頷いた。

「ノアだって私たちと同じ、島民だものね？」

「うん、私、ディアと一緒に。」

「ただ、その尻尾だけは気をつけないとね。」

「そうね。気をつける。」

ノアは、寂しいのかも知れなかった。人魚はきつと、彼女しか生きていないだろうから。

島民独特の衣装で着飾り、化粧された二人は、どちらも可愛らしく綺麗だった。

「ふむ。よく出来たな……。これでお迎えする準備が出来た。」
婆様も満足そうに頷いていたが、セイはどこか不安だった。

よく晴れた空のもと、潮風の香る島民達の生活する場所へやってきた兵士達は、島民全員を前へ集めた。
特に用件も言わず、無言でやってきて、無言で島民を見物している。

そして、ディアに目を留めた。

「その娘、こちらへ。」

言われて、ぞわりとディアの身体が総毛立った。

（汚らしい？？本土の人間の元へ行けと？）

しかし、ここで逆らえば命はない。下手をすれば、他の島民の命さえ。

嫌悪と怒りを抑えて、そろりと立ち上がって前へ踏み出す。と、信じられない言葉が聞こえた。

「その娘もだ。」

それは、誰あるうノアへ向けられた言葉だった。

「その娘は??」

「お前は黙ってこちらへ来い!」

ノアを庇おうとしたディアは、兵士から剣を向けられて恐怖に震えた。

（ノア??!!）

「お前、我らの言う事が聞けぬのか!」

「っ……!」

怒鳴られ、ノアは震えた。言う事を聞かなければと思うものの、ノアは、動けない。立ち上がる事など出来る筈もないのだから。

「貴様……!」

怒る兵士が島民を押しつけ、ノアの腕を掴んだ。

「ノア!」

叫んだのは誰だろうか。

「あっ……」

腕を引かれ、ノアは引きずられる。その姿を見た兵士が息を呑んだ。

「お、お前……!」

島民達が押しのけられ、今やノアの姿は本土からやってきた兵士全員にはつきりと見えただろう。その、美しい鱗に覆われた尾も。

その空気に、ディアは咄嗟に動いた。

「ノア!」

「待て!……貴様、許さぬ!」

ドン、と、空気が震えた気がした。

「あっ……」

ノアの目の前で、鮮血が、ゆっくりと宙を舞った。

「っ……」

ディアがこちらへ手を伸ばしている。けれど、そのまま地面へ倒れていってしまうのは、どうしてだろう？

どさり、とディアが倒れてから、ノアを含む島民全員が、何が起きたかを理解した。

わああ、と叫び声上がり、静かにさせる為に兵士達が数人を犠牲にする。島民達は震えながら衝撃を抑えた。

「歯向かうものは許さぬ！よく覚えておけ！」

そう怒鳴られ、しん、と静まり返った。その瞬間、セイは弾かれたように動いた。

「ぐあっ……！」

もともとノアの側にいたのだ。そこから飛び上がって思い切り兵士の脇を蹴り倒し、すぐにノアを抱え上げて走り出した。

「あれを追え！殺せ！」

兵士の怒声が聞こえる。島民達はどうしているだろう。ディアはディアの骸は。

だが、走るのを止めない。ディアはノアを守りたい筈だ。守るべきだとセイは思ったのだ。

ノアは震えている。それをしっかりと抱え込んで、セイは走る。「貴様！殺してやる！」

兵士の怒声が近づいてくる。もうすぐ剣が届くかも知れない。

「くたばれ！」

「がつ……！」

激痛と衝撃が腹を貫いた。

（倒れる……ノア！）

転ぶように倒れながら、渾身の力を込めて、ノアを海へ投げ出した。

「セイ！？」

母なる海へ放り出され、ノアはディアの死という衝撃から我に返った。

「ぐあつ……！」

丸太で組まれた通路の上で、セイが、兵士に剣を突き立てられていた。

「この、愚者が！切り刻んでくれる！」

「がつ……あつ！」

いたぶられながらも、セイは必死にノアを見た。恐怖に怯える目は、それでもしっかりとセイの視線と合わさった。

「ノア……！逃げろ……！」

もう望みが絶たれた身体で、セイは叫んだ。兵士はさらに怒り、執拗に剣を突き立てる。

「行け……！」

ノアにだって分かる程、セイは、兵士に切り刻まれていた。もう、助からない。

「ノア……行け！」

だけど、セイ。ディアだってそばにいないのに。

「逃、げる・・・！」

ドン、と、また空気が震えた気がした。

セイの伸ばした腕が、力を失っていく。

「・・・」

ノア、と、呼ばれた気がした。ノアを見つめる瞳が、光を失っていく。

ぱたり、と腕が落ちる。

セイはもう、喋らない。だけど最後に、逃げろ、と叫ばれた気がした。

（セイ・・・！）

兵士が息を切らせながらこちらを見た。その瞬間にノアは身を翻し、青く深い海へ泳ぎ出した。

海はノアを守る。人魚を、守る。

（どうして・・・！どうして・・・ディア！・・・セイ！）

深く深く泳ぐ。さっきまでの出来事を消し去るように。簡単には浮かんで行けないように。

（何がいけなかったの・・・？）

人では絶対に辿り着けない程深くに、大きな洞窟があった。そこ

へ入り込んで、ノアは泣いた。
(何もしてないのに……！)

しばらく泣いて、ノアは伏せていた顔をあげた。

「……許せない……」

ディアもノアも、島民の皆も、何一つ悪い事はしていないのに。

「お母様……助けて……」

祈るように組んだ両手の中に、海を凝縮したかのような宝石があった。

??これはね、ノア。私たちの宝よ。

母の声が蘇る。

??これに私たちの血を捧げれば、海は一度だけ私たちの望みを聞いてくれるの。

(わたしの望み……)

憎かった。ノアの大切な居場所を無惨に奪い、罵るあの人間達が。
「許さない……あの人間達。ここへ寄越した王子も……！」

ノアは宝石の鋭く尖ったところを、自分の手首へ押し付けて滑らせた。

途端に滴る鮮血が、人魚の宝へと零れていく。美しい海の青が、
血と混ざり合って色を変えた。

青い海に抱かれて

王子は、静かに窓の外を眺めていた。

（今頃また・・・花嫁探しが行われているのか・・・）

王子にとってはなんの意味も感じない事だった。全ては義母と、父の決める事。

それ以外を選ぶ権利も、それに逆らう権利も、彼には許されなかった。

ただ、言われたままに生きる日々。

父は、もともと独裁者だった。

だが後妻を迎えると、凶悪さが増した。

意見を許さず、残虐さを好むようになった。

・・・この国で、幸せを感じるものはいるのだろうか。そう、考える程に。

「いつそ・・・滅びた方がいいのかも知れないな・・・。」

そう、呟いた時。

眺めていた景色が動いた。

「・・・？・・・海、が・・・。」

驚愕に目を見開いた。海が大きく立ち上りながらこちらへ迫ろうとしていた。

誰かに知らせなければ。

そう思うのだが、迫り来る海は異様なまでに美しく見えた。

「・・・この海に吞まれるのなら・・・それも、いいかも知れない・
・・・」

いつか後妻が子を産み、殺されるくらいなら。

いつそこの美しい海に殺された方がいい。

そう思うと、近づく海に魅入られて、その場を動けなかった。

海はその望みを叶えようともいうように、見る間に迫った。

「殿下・・・っ！」

部屋の扉が開くのと同時に、窓硝子は碎け飛び？

死の衝撃が、全てを襲った。

??許さない・・・！

上下左右もぐちゃぐちゃで、多分、身体には海が襲って来た時に
碎け散った、硝子の破片がところどころ突き刺さっているような気が
する。

それすらどうでもいいと思う程、恐ろしいまでの海の流れに巻き
込まれている。

??許さない・・・！

また、声が聞こえた。死にたいと願った自分が生み出した幻聴なのかと思っていた。だが、どうやら違うようだ。

愛らしく澄んだ声は、想像で生み出せるものではない。

??許さないわ。人間なんて大嫌い・・・！

人間なんて、という言葉に戸惑う。では、この声の主は人ではないのか。

（ああ、だから・・・彼女が海を呼んだのか。）

おかしな程すくと、その考えが心に落ち着いた。

（なら、きつと海のように美しいに違いない。）

とつくに死んでいる筈の自分が、こんな事を思える事が可笑しい。

??王子はどこ・・・？王子が人間を寄越したんだと言ってたわ・・・！

声は、切迫していた。

だからなのか、勝手に呟いていた。海に吞まれた状態では、呟いたのか思っただけなのか分からないが。

（王子は、俺だよ。もう死んだ。・・・もう、心配いらないよ。）

そう呟いて、ああ、とまた考えた。

（そうか・・・。君は人魚なのかも知れないな。・・・だから、海が君に応えたんだ。）

??ディアを返して！セイを返して！皆を返して！

声は泣き叫ぶ。それに応えられない事が、少しだけでもどかしい。

（もしかして、父の犠牲になったんだろうか・・・）

そうなら、自分には声をかける資格もない。そう言えば人魚を絶滅に追いやったのも父だ。

美しい人魚を鑑賞する為に生け捕ろうとして、抵抗あれば即座に殺していた。

美しい鱗を剥ぎ取り、それを他国へ売りつけていた。

（ああ、君はやっぱり、人魚なんだろうな。）

泣いている気がして、その涙を拭ってあげたかった。姿さえ見えないし、そもそも聞こえてくるこの声が、幻聴ではないとは言いきれないけれど。

??返して・・・！わたし達の幸せを返して・・・！

泣いている。

もどかしい。

??わたし達は、海で暮らしていただけなのに・・・！

ああ、そうだね。

君たちは生きていただけなのに。

でももう、大丈夫だよ。

この美しい海が全て消してくれる。
国は滅んだ。

生きている者などいないだろう。

君達を害すものはもう・・・――??

何ひとつ、ないんだよ。

もし出来るなら

君の姿を

一度だけでいいから

この目で見てみたかった。

青い海に抱かれて（後書き）

いかがでしたでしょうか？

私自身はこういう悲しい最後は 大の苦手 だったりするので
けど・・・

悲し涙が出そうなものは、極力自ら選ばない努力をしていたりし
ます。だって泣き崩れるから。

でも書きちゃったこのお話は完全に思いつきです。

しかも中学生の時に「赤いろうそくと人魚」を読んで思いついて、
漫画で描いたものの残酷シーンが描けなくて（絵にするとコワイじ
やないですか。）そのまま封印してあった物語でした。

しかし、書いてしまいました。

自分がこええ・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1803y/>

青い海の王国

2011年11月13日11時19分発行